

乙頁

第87号 通巻16巻第2号
1996年7月31日 発行

守山市立埋蔵文化財センター
☎0775-85-4397

☎524-02
守山市立服部町2250番地



◁戦闘の様子
(想像図)

☆ 下之郷遺跡現地説明会開催

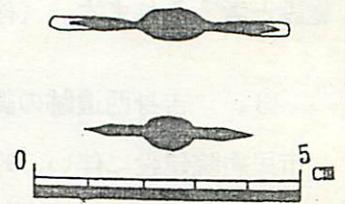
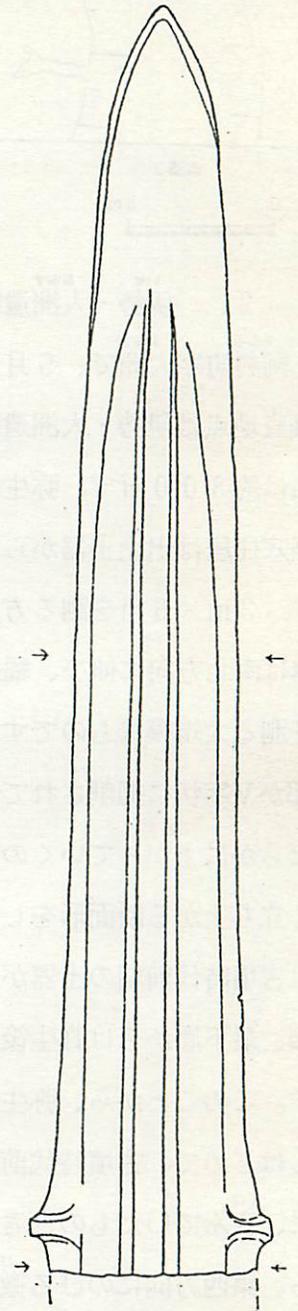
^{しものごう}下之郷町に所在する、弥生時代中期の環濠集落である下之郷遺跡の現地説明会を、6月29日(土)に行いました。調査地はJR守山駅から北西に約2kmの地点にあたり、やや交通の便が悪かったのですが400名を越える見学者が訪れました。弥生時代中期の暮らしぶりを示す掘立柱建物や3重の環濠、石斧や石剣などの石器類、土器などを、多くの人に見て頂きました。特に今回の調査で、近畿地方では唐古・鍵遺跡について2例目となる環濠集落の出入口が検出された点は、貴重な成果といえます。また、ムラを堅固に囲む環濠や、武器類の出土などから、弥生時代に戦いが行われていたことを示していると考えられる研究者もいます。

発掘調査だより

1、下之郷遺跡の調査 ※ 大規模な弥生時代中期の環濠集落

4月末より調査を行っていた下之郷遺跡は7月末をもって終了しました。今回の調査では、当初に予想されたとおり3条の環濠と集落内部の建物群等が検出されました。見つかった3条の環濠のうち一番内側の濠は、当初は水の溜まっている状態があったと思われませんがその後、一部を土砂で埋めもどし、土橋状の通路が作られていました。土橋の両側には直径10cm程の丸太を立ち並べて柵としていました。その土橋を通り、集落に入った場所には、2本対になった柱跡があり、門柱のようなものが立っていたと思われま。また、集落に入った場所には、3棟の掘立柱建物跡が見つかりました。これらの建物には、遺構の切り合いから新古関係が認められ、建て替えがあったものと思われま。いずれも高床式の建物で、出入口を守備する建物であった可能性があります。

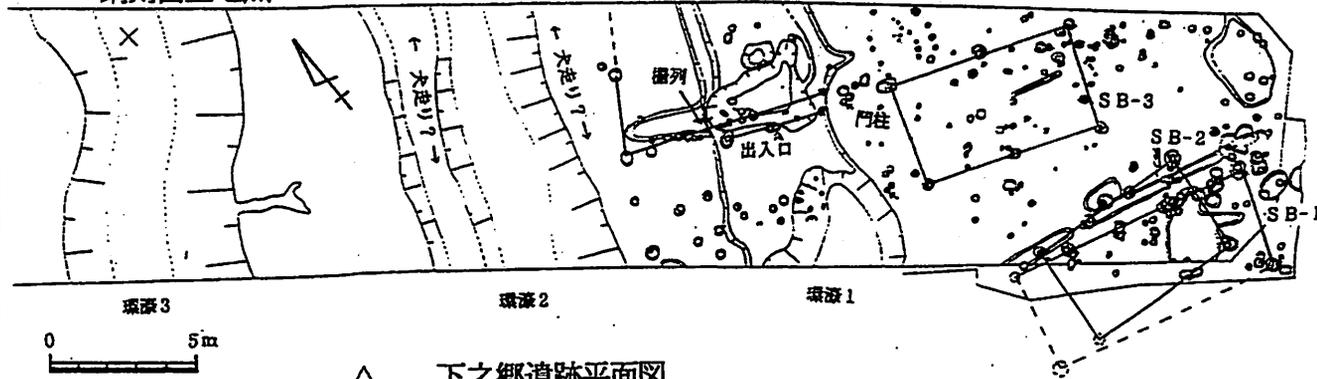
これらの建物や、柵列を配した出入口の周辺には、打製や磨製の石鏃や石剣が散乱した状態で多数出土し、また内濠からは弓(葛まきの長弓)が、外濠からは銅剣(中細型銅剣)が発見されました。これらの武器や施設の検出



△ 下之郷出土銅剣

状況から、当時この地点で戦闘状態があったことが想像されます。(川畑)

銅剣出土地点

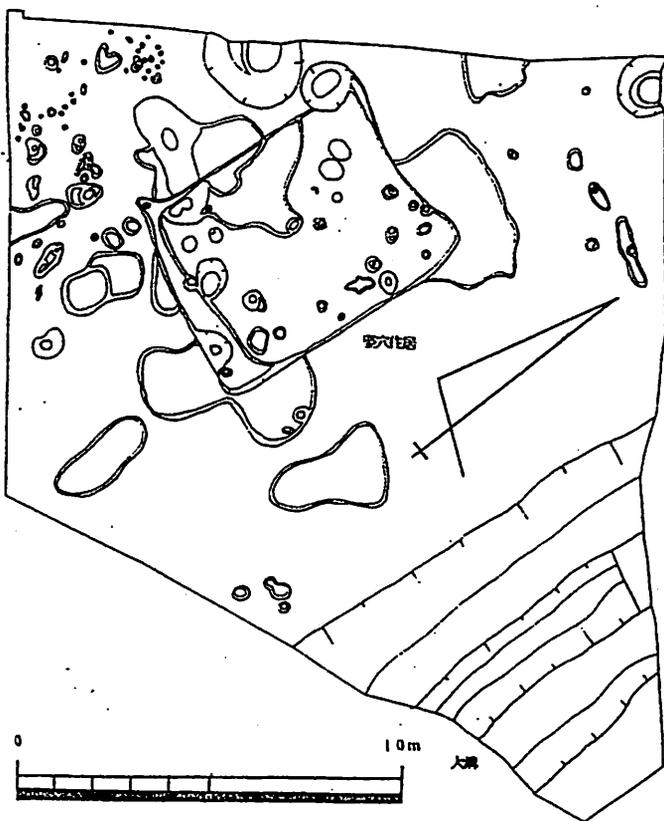


△ 下之郷遺跡平面図

2、伊勢・大洲遺跡の調査 ※ 弥生時代後期の大溝を検出 (6次)

阿村町字大洲で、5月上旬より行っていた伊勢・大洲遺跡の調査も7月上旬で終了しました。今回の調査地点は伊勢・大洲遺跡でも最も高所に位置するところで、集落域の東端にあたります。調査対象面積は約300㎡で、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての大溝、^{たてあなじゅうきょ} 竪穴住居などが検出されました。竪穴住居は出土土器から古墳時代初頭とみられ、

5. 3m×6mを測る方形プランの住居です。大溝は南北方向に伸び、幅約7m、深さ約2.2mを測る大規模なものです。断面形は逆台形で中央部がV字状に掘削されています。集落の内側はなだらかに上がっていくのですが、外側は垂直に近く立ち上がる断面形をしています。溝の中層からは古墳時代前期の土器が、下層からは古墳時代初頭、最下層からは弥生後期の土器が出土しています。このことから、弥生時代後期にこの溝が埋没しはじめて、古墳時代前期にも完全には埋まらずに、^{くぼ} 窪んでいたものと考えられます。調査位置から、東西方向にのびる^{びこうち} 微高地を南北方向に切断する溝と見られ、伊勢・大洲遺跡の東端を区画する施設と考えられます。(伴野)



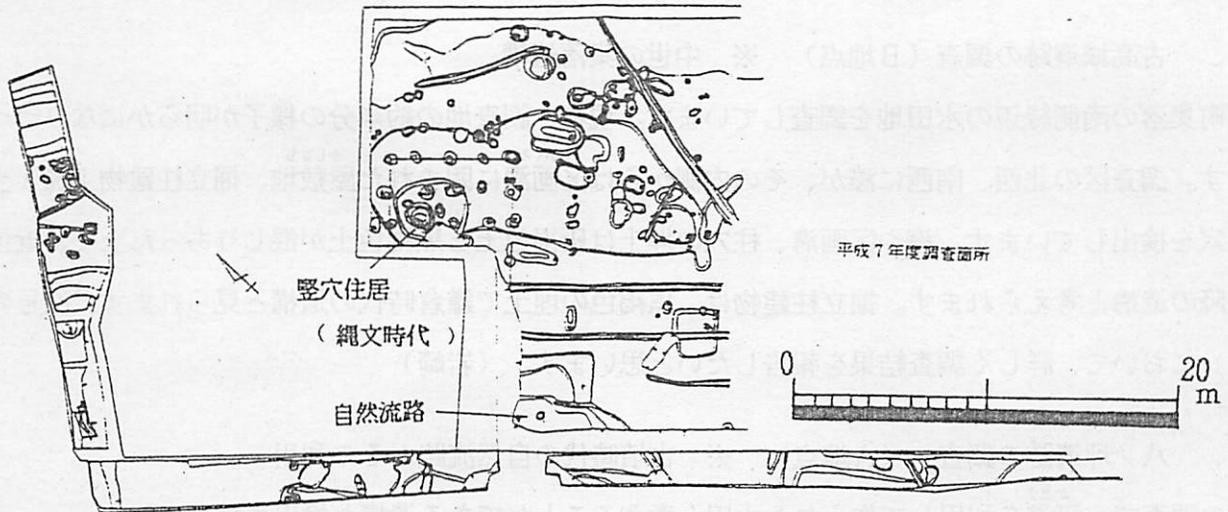
△ 大洲遺跡平面図

3、吉身西遺跡の調査 ※ 縄文時代から古墳時代の複合遺跡

市民病院建設に伴い、昨年度に引き続き調査を行いました。今回は、約600㎡を対象に5月14日から6月6日までの間、調査を行いました。その結果、縄文時代後期末とみられる竪穴住居1棟、弥生

時代後期の竪穴住居・土壌、古墳時代後期の溝や自然流路などが検出されました。縄文時代の竪穴住居は、4m×3mの規模の楕円形の平面プランで、^{せきぼう}石棒状の石器が柱穴から出土しました。今回の調査地点から100 m南で同じ時期の集落が検出されていて、その集落との関係が注目されます。(小島)

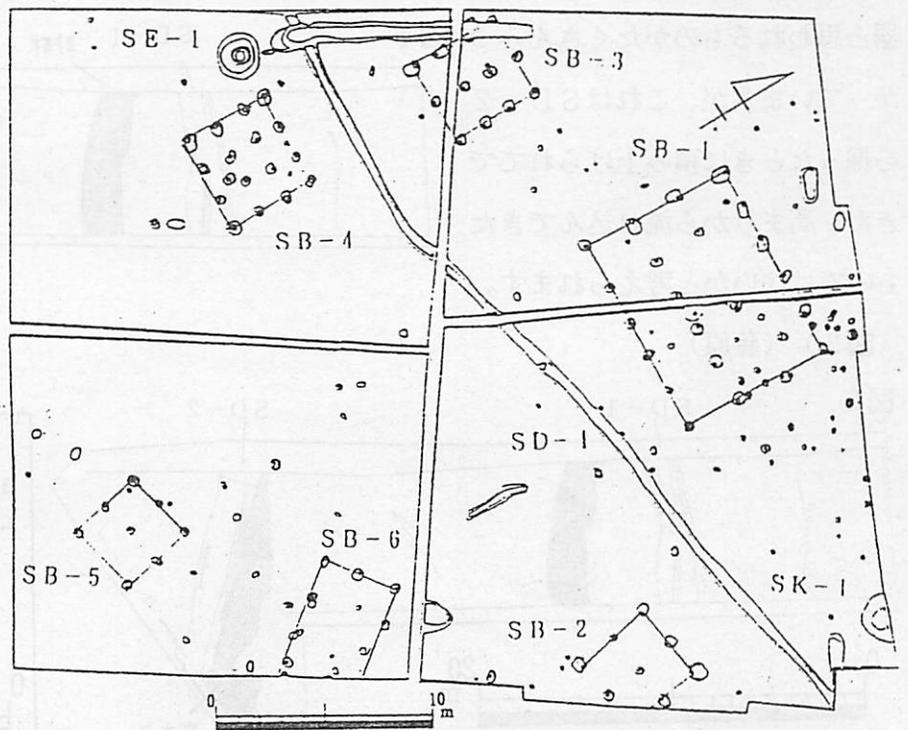
▽ 吉身西遺跡平面図



4、古高城遺跡の調査 (A地点) ※ 奈良・平安時代の集落

前号で報告した^{えんまどう}焰魔堂町に所在する古高城遺跡の調査も5月31日で終了しましたので報告します。図のとおり掘立柱建物6棟 (SB-1~6) と溝 (SD-1、2) 土壌 (SK-1~5) 柱穴と井戸1基 (SE-1) などが調査で見つかりました。SB-1は南側に^{ひさし}庇を持つ2×5間の建物で、SB-2、5は2×2間、SB-4は3×3間、SB-2は2×3間の規模です。SB-6は他の5棟と柱穴

の埋土や方位が異なっていますが、SB-1~4は方位が南北方向であること、^{すみまるほうけい}隅丸方形の柱穴であることから、同時期と見られます。やや西に^{かたよ}偏るSB-5も出土土器から見てSB-1~4と同じく奈良~平安時代前期の建物と考えられます。次に、井戸SE-1は深さ3.5mを測る井戸で、3段の^{おけわく}桶枠を井筒に用いています。出土遺物からみて、



△ 古高城遺跡 (A地点) 平面図

SK-1・SD-2と同じく近世以降の遺構と考えられます。奈良時代から平安時代前期の掘立柱建物に見られる遺構は、古高城遺跡のこれまでの調査では見つかっていません。一過的で小規模な集落だと考えられますが、古高城遺跡の新たな側面が判明したことが、今回の調査の大きな成果であるといえます。(岩崎)

5、古高城遺跡の調査 (B地点) ※ 中世の集落遺構

古高町集落の南側縁辺の水田地を調査しています。現在、調査地の約半分の様子が明らかになりつつあります。調査区の北西、南西に濠が、その内側からは区画溝かくろぞに囲まれた屋敷地やしきち、掘立柱建物1棟・土壇・柱穴を検出しています。濠や区画溝、柱穴の埋土は灰褐色土と黒褐色土が混じりあった土で、近世近世以降の遺構と考えられます。掘立柱建物は、黒褐色の埋土で鎌倉時代の遺構と見られます。次号の「乙貞」において、詳しく調査結果を報告したいと思います。(岩崎)

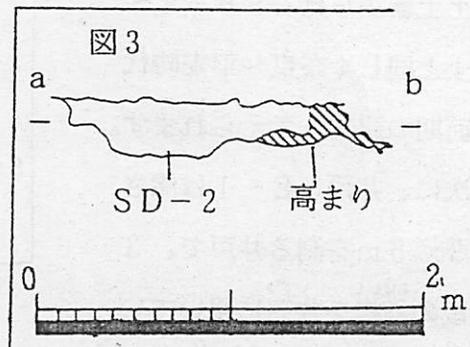
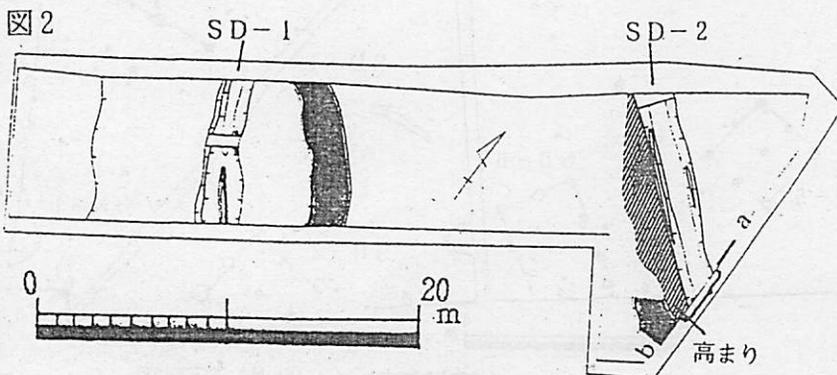
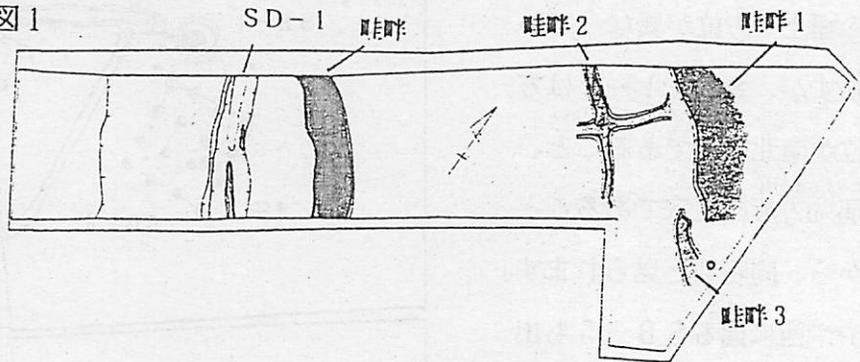
6、八ノ坪遺跡の調査 (A地点) ※ 古墳時代の自然流路とその利用

下層の調査で、河道かどうを利用して作られた水田と考えることができる遺構が検出されました。

旧河道の脇に大畦畔だいきいはん(畦畔1)がつくられ、その内側に、水田を区画する小畦畔しょうけいはんがつくられていたと思われま。 (図1) 畦畔は後世の削平を受けているため残りが悪いのですが、水田は小区画だったと考えられます。(畦畔2・3) この水田面からは、6世紀中頃につくられた須恵器の坏身がみついています。SD-1は、砂で埋まっています、水が相当流れていたことを示しています。溝底からは古墳時代中期の土器が出土しています。SD-2もSD-1と同じく水が流れていたと考えられます。縄文土器と思われるものがたくさんみつ

かっています、これはSD-2を掘ったときに積み上げられてきた、高まりから流れ込んできたものではないかと考えられます。

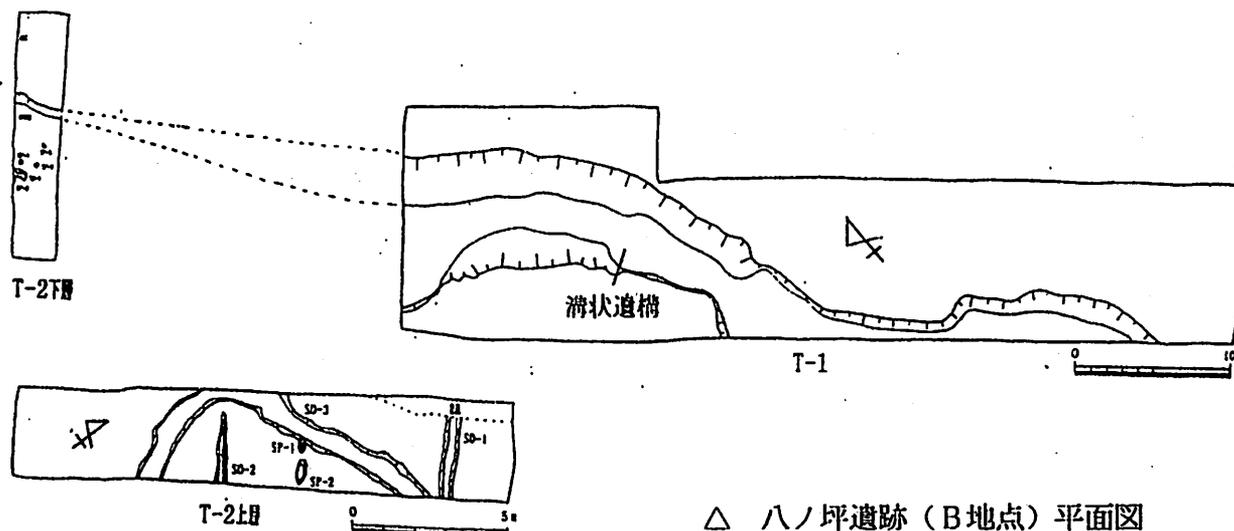
(図3) (藤原)



△ 八ノ坪遺跡 (A地点) 平面図

7、 八ノ坪遺跡 (B地点)

6月上旬から開始した八ノ坪遺跡の調査も、梅雨のさなかで遺構検出と排水作業を繰り返し、進んでいます。今回は、共同住宅建築工事に先立つもので、9月下旬をめどに約2000㎡を対象に調査を実施する予定です。現在1000㎡の調査が終了したところです。T-1では、幅4m~10m、深さ約20cm~30cmを測る自然流路を検出しました。T-2の上層では古墳時代の溝(SD-3)を検出したほか、溝2条(SD-1・2)、柱穴(SP-1・2)を検出しました。SD-3以外の遺構からは、遺物が出土しなかったため時期決定するには至りませんでした。SD-3は、同一の埋土であるSP-1・2に切られていることから、溝(SD-3)よりも柱穴(SP-1・2)のほうが新しい遺構と考えられます。T-2の下層からは溝状の遺構の他、柱穴4つ(SP-3~6)土坑(SK-1)を検出しました。下層で検出した溝状の遺構は、T-1で見つかった流路と関連するものではないかとみられます。出土遺物については、整理作業が進んだ状態でお知らせします。(小出)



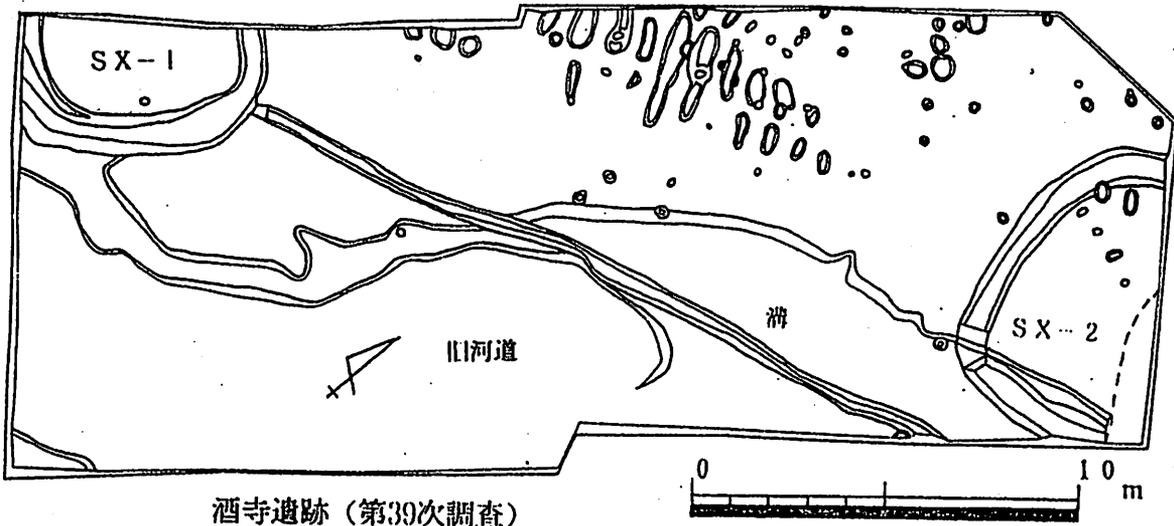
△ 八ノ坪遺跡 (B地点) 平面図

8、 酒寺遺跡 (第38・39次調査)

播磨田町字平成の里において、2カ所の発掘調査を行いました。38次調査は店舗建築に先立って、約148㎡を対象に5月20日から23日にかけて発掘しました。遺構はピット4つ、土壇1基、溝1条を検出しました。土壇は東に向かって浅く落ち込み、調査区外へと広がるもので、須恵器が出土していることから古墳時代後期と考えられます。また、ピットからも須恵器が出土し、土壇と同時期と思われます。溝は少しカーブしていることから、方形周溝墓の可能性があり、弥生土器がわずかに出土しています。

39次調査は宅地造成に伴い、約485㎡の面積を6月10日から調査しています。検出遺構は、方形周溝墓2基、溝1条、ピット、旧河道があります。方形周溝墓は両方とも全体を検出していませんが台状部で、一辺がSX-1で約5m、SX-2では6.2m前後を測る規模です。出土遺物から弥生時代後期と考えられます。溝はSX-1の東隅付近から東に向かってのびる幅50cmです。遺物は無く時期は不明ですが、方形周溝墓と溝は旧河道に切られ、旧河道から古墳時代後期の須恵器が出土していることから、

それ以前の時期であると思われます。(畑本)



酒寺遺跡 (第39次調査)

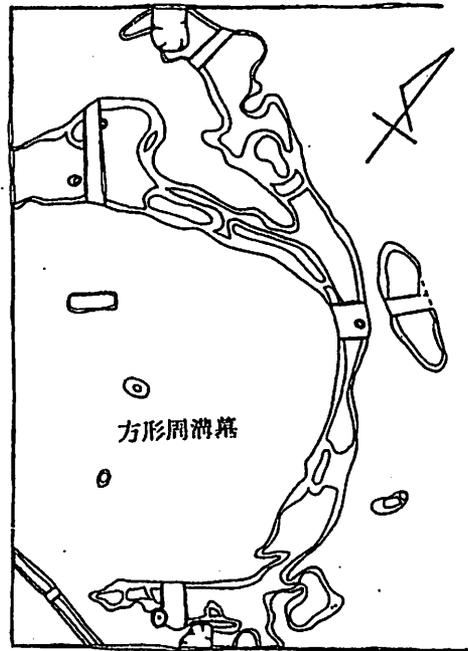
△ 酒寺遺跡 39次調査平面図

9、^{はりまだにし}播磨田西遺跡の調査

下之郷町字尾中において、ガソリンスタンド建設に先立つ調査を実施しました。ここは昨年9月から10月まで既に調査をしていて、今回は計画変更から新たに生じた約240㎡が対象とし、3ヵ所のトレンチを設定しました。遺構は第1トレンチで溝と土壇、第2トレンチでピット・溝、第3トレンチで溝ピットを検出し、溝は先の調査に続くものであることがわかりました。(畑本)

10、^{つかのこし}塚之越遺跡 (第11次調査)

4月より約4000㎡の調査が終了しました。この中で注目すべき発見は以前報告しました、掘り直された^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓とは別の群と考えられる地点で、方形周溝墓と考えられる遺構が発見された事です。これは他の溝と切り合っていて、周溝の深さも浅く、残りがあまり良くないものです。一部に^{りっきょうぶ}陸橋部を持っています。時期は、周溝より土器が出土していないので特定できませんが、切り合っている溝や、つながっている土壇から出土した土器から、弥生時代後期のものと考えられます。このような形の墓は当遺跡第9次調査で検出した前方後方形周溝墓や、当遺跡と接している栗東町の^{へそ}縄遺跡からも辺の一部に^{りっきょうぶ}陸橋を持つ方形周溝墓や、前方後方形周溝墓が見つかっています。この付近では、このような形態の墓がまだ多数存在する可能性があります。(佐々木)

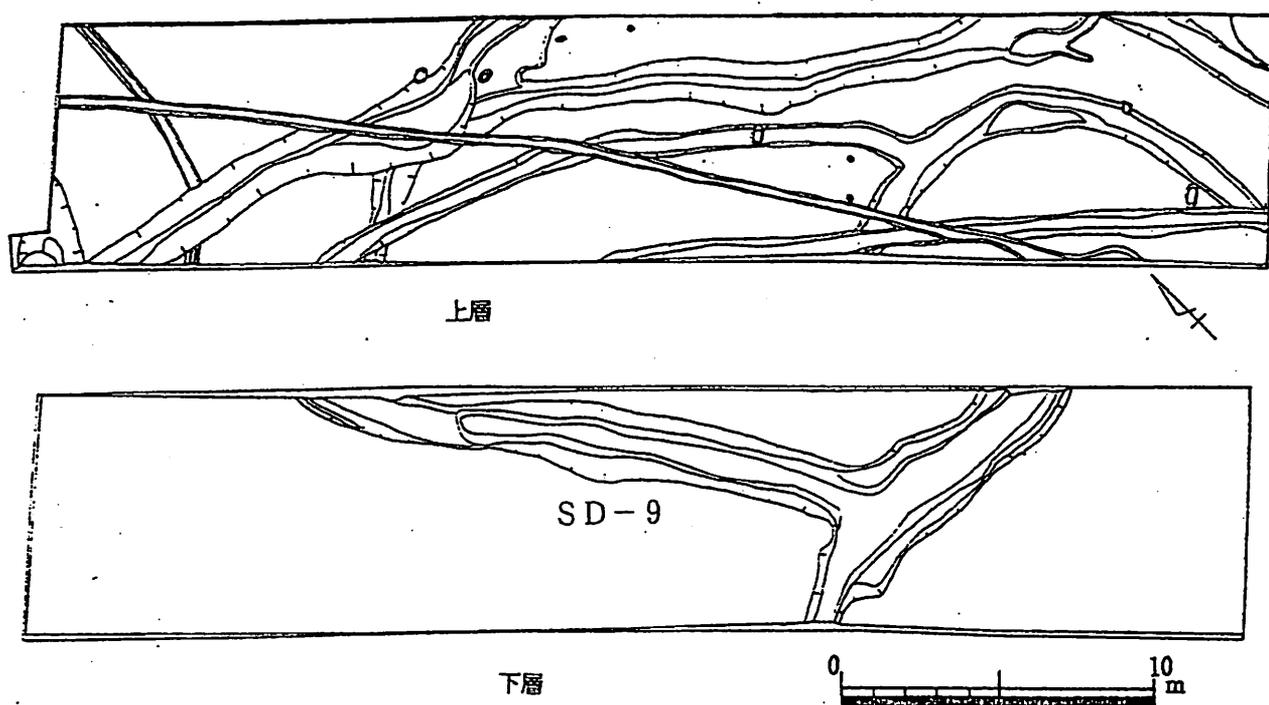


塚之越遺跡第11次調査平面図 △

11、 吉身西遺跡（第72次調査）

県立小児医療センターの北東約500mに位置する水田地で、共同住宅建築に先立ち、約300㎡を対象に調査を実施しました。5月末で調査は終了しましたが、整理中なので、今の時点でわかっていることをお知らせします。

下層からは幅約2.0m、深さ約1.5mの溝（SD-9）が見つかっています。上層の溝は南西方向に湾曲するのに対して、下層の溝は北西方向に湾曲しています。この調査区の北東には環濠をもつ下之郷遺跡が広がっていて、これまでの調査より、3条の環濠と、その外側に2～3条の溝が所々で途切れながら、存在することが確認されています。3条の環濠のうち、一番外側の環濠はこの調査区の隣の地域に存在すると考えられています。下面の溝は北に行くに従って浅くなり、調査区の外で途切れるようです。また、規模・遺物の量・上面の溝の時期も併せて考えると、今回の下面の溝は3条の環濠の外側に付随する溝のようです。またわずかながら、溝底から植物遺体しょくぶつたいが見つかっています。今後の検討によって下之郷遺跡と併せて当時の環境が復元できたらと考えています。（山中）



△ 吉身西遺跡第72次調査平面図

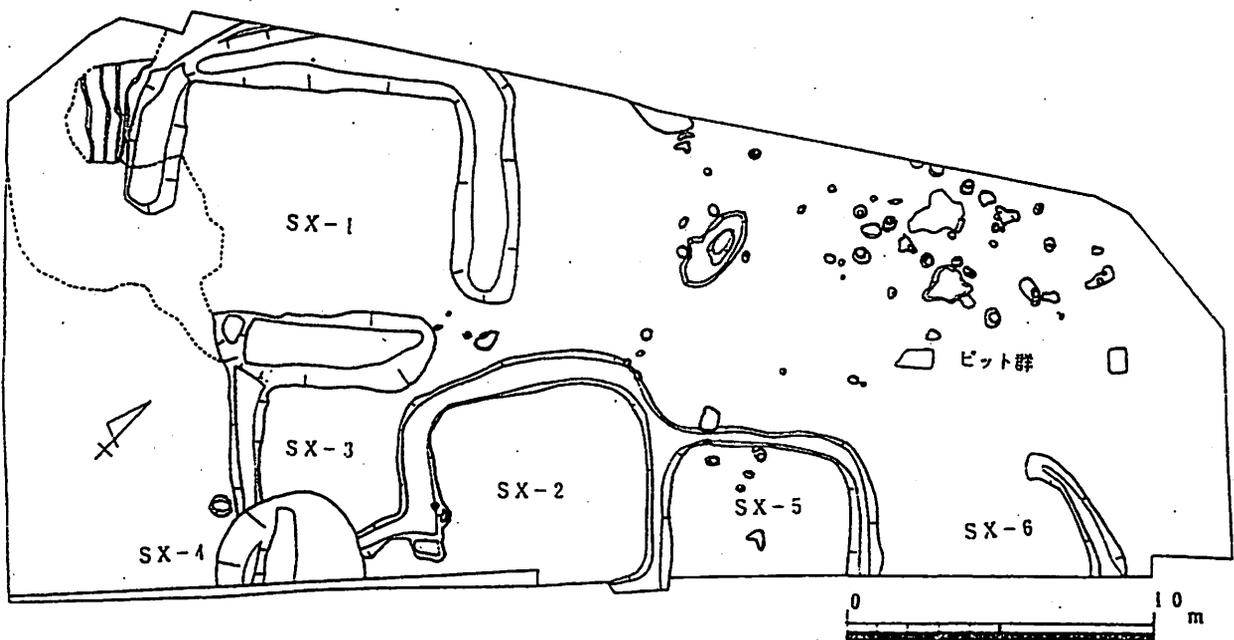
12、 酒寺遺跡の調査（第37次調査）

前回報告した酒寺遺跡（37次調査）は、5月末に終了しました。現在整理中なので、分かっている事を中心に報告したいと思います。

残りの北半を調査したところ、方形周溝墓3基（SX-2・5・6）、土壙（SK-1～4）と柱穴群（P-1～64）等が検出されました。これらの方形周溝墓の埋葬施設まいそうしせつは後世の削平こうせいにより残っておらず、周溝だけが検出されました。このうちのSX-2は前号で紹介した方形周溝墓の続きです。

方形周溝墓の規模は、SX-2は一辺約9m、SX-5は一辺約7.5mを測ります。SX-6は後世に攪乱を受けたものと考えられ、この調査区からは一辺しか検出できませんでした。西辺の溝は残っていないものの、SX-2・5とその規模はあまり変わりなかったものであったと考えられます。

これらの方形周溝墓の時期はSX-2は周溝内から出土した土器から、弥生時代後期であると考えられます。SX-5・6からはあまり土器は出土しませんでした。しかし、SX-5・6はその規模や方向がSX-2に近いと考えられることから、時期もほぼ同時期であると考えられます。また、ピット群からは須恵器が出土していて、古墳時代後期であると考えられます。 (中村)



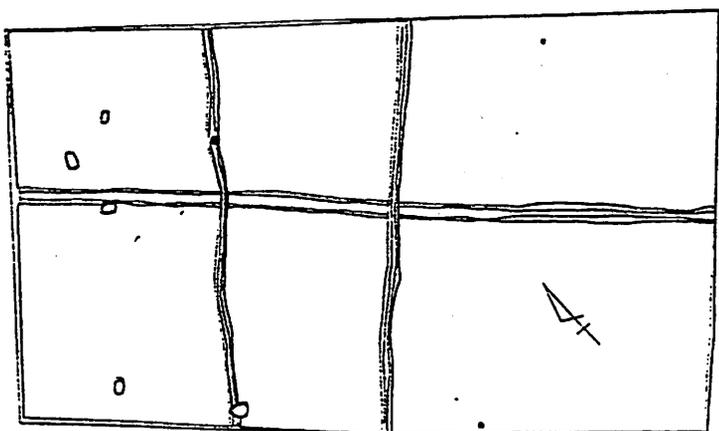
△ 酒寺遺跡第37次調査平面図

13、古高遺跡 (第10次調査)

守山南中学校の北西側の水田約330㎡で、病院建設に先立ち7月9日～16日の期間調査を実施し

ました。遺構は表土より30cm程で溝3本ピット8つが検出されました。溝のうち、トレンチの長辺方向の溝は、この調査区の南側の道路の調査でも見つかっていて、その続きと思われます。中からは土師器の小皿が数点出土しました。この溝が検出された面から約30cm下層で、青灰色粘土の堆積が確認されました。この粘質土は、約2.

0mの厚みがあり、下層ではヨシなどのイネ科の植物を含む腐食土層が、約1m堆積

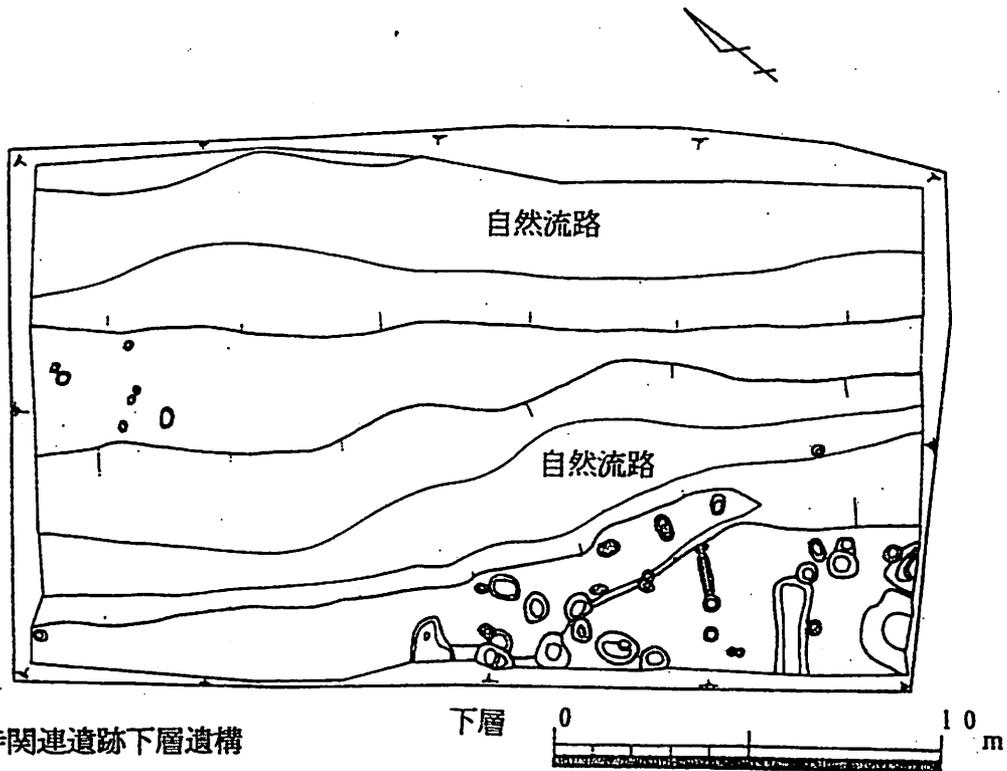


△ 古高遺跡平面図

しています。このことから、13世紀頃になってようやくこの地域の開発が始まったのではないかと考えられます。(山中)

14、益須寺^{やすでら}関連遺跡

吉身小学校の西側で、店舗付共同住宅建築に伴い6月24日から7月19日までの期間で発掘調査を実施しました。調査の結果、表土下30cmで鎌倉時代頃の^{ほうかんそう}小溝3条、その直下で奈良時代の^{ほうかんそう}包含層、さらにその下層から古墳時代後期から奈良時代にかけての柱穴と古墳時代後期の自然流路などを検出しました。奈良時代の包含層からは多量の土器のほかに瓦片も少量ながら出土していることから、益須寺に関連する集落跡が^{なかせんどう}中山道(東山道をほぼ継承したといわれる)を越え、さらに北側に広がっている可能性が考えられます。なお、調査地の字名は「堂ノ北原」といい、「堂」が調査地の南約500mの地点にある白鳳寺院と比定されている益須寺遺跡をさすとすれば、非常に興味深いものです。(小島)



△ 益須寺関連遺跡下層遺構

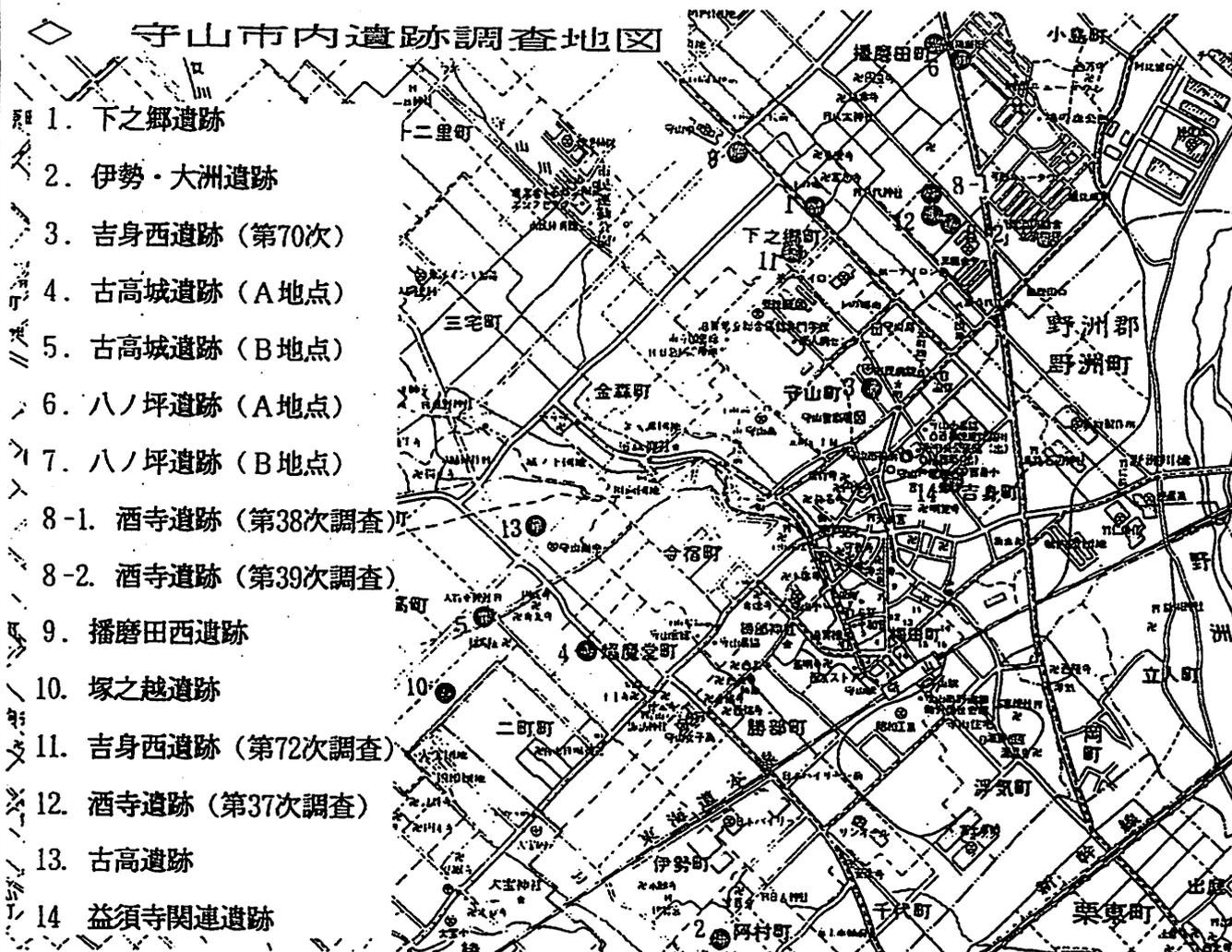
視点 ～ 埋蔵文化財の保存と調査の進展のために ～

^{ねんりんねんだいほう}年輪年代法による^{れきねんだい}暦年代の見直しが^{いけがみ}池上・^{そね}曾根遺跡及び^{にのあせ}二ノ畦・^{よこまくら}横枕遺跡の木材から行われた。これまで、考古学者が想定していた年代観からおよそ100年ほど古くなるものであった。弥生時代の年代観は^{さばら}佐原 ^{まこと}真氏が一定の数値を与えてから、何人もの研究者(石野、^{つて}都出、白石、丸山、森岡氏等)が特に後期を中心に論争されていたが、今回提起された年代とは相当な差があるものであった。

これらの研究の^{けいり}経緯(研究史という)が重要であり、^{ちから}著わされたそれぞれの時期での問題意識によるものであって、その意識の濃さがなければ決して発展してこなかったものである。今日の年輪年代法分析による年代は従来の考古学的手法では、予測できるものではなかった。最近、特に中期の終わりから

後期の初め、そして後期の終わりが問題となってきた。^{やまたいこく}邪馬台国時代と呼ばれる頃の研究と無関係ではないことが窺われるが、目的は単にそれだけではなく、土器の変化を追うことで、^{うかが}純粋な考古学としての研究が元になっている。しかしながら、近畿地方では北九州と異なり、^{どうきょう どうけん どうぼこ}銅鏡や銅剣、銅矛の出土が無く、中国大陸などとの年代の比較が困難であったため、暦年代の研究が遅れていたことも事実である。今回の年輪年代による年代観の枠組みの変化は北部九州の年代に近いことから、今後それぞれの土器の変化を相互に比較しながら、さらに詳細な分類が必要となる。

また、研究者の中には、今回の提起に対して批判的な意見を唱える方もいる。1、2例だけでこれまでの考古学の蓄積を放棄することは問題だというのである。確かに、意見としてはあり得ることではある。しかしながら、^{けんきょ}謙虚な姿勢で、これから発掘されるであろう木材を積極的に年輪年代法で年代を求める姿勢こそ、年輪年代学だけでなく、考古学を歴史学に高めてゆく方法ではないだろうか。今後は年輪年代学を認める者と否定する者の二者に大きく分かれて論争が行われるだろう。成り行きに注目しながら、守山市では年輪年代法による分析を進めてゆきたいと思う。



◇編集後記 30℃を超える暑い日が毎日続いています。外に出て発掘していても、とっても暑いですが、時折そよぐ風にふと自然のありがたみを感じます。(M. N)